

超絶主義季刊誌『ダイアル』に書かれた 「仏陀の教え」の大意

田 中 泰 賢

訳者前書き

1844年の1月、『ダイアル』(*Dial*) (季刊誌、年4回発行)に「仏陀の教え」(“The Preaching of Buddha”)という題名の仏典の英訳が掲載された。この「仏陀の教え」によって「アメリカ人が仏教について語り始めた」とトマス・トイード (Tweed xxxi) は述べている。1844年は江戸時代の弘化元年であり、1868年の明治元年まで24年あった。

1961年にリプリントされた『ダイアル』誌第4巻第3号を見ると、掲載された「仏陀の教え」の編著・訳者の名前はない¹⁾。現在のところ、この編著・訳者をめぐって二つの意見がある。一つの意見としてジョン・ルーディ (John G. Rudy) はこの「仏陀の教え」はヘンリー・ソロー (Henry David Thoreau) の編集によるもの (222) としている。それに対する異見としてトイードはエリザベス・ピーボディによるものとしている²⁾。この「仏陀の教え」がソローによるものであれ、或いはピーボディによるものであれ、いずれにしろこの「仏陀の教え」は匿名で季刊誌『ダイアル』から発信されたことは事実である。だから仏教の側から見ればアメリカ人に仏教への門戸を開ききっかけを作った季刊誌、『ダイアル』誌の功績は大きい。

エマソン (Ralph Waldo Emerson) も「仏教関係の書物を読み出したのは1846年頃からのこと」(Whicher 235) という。超絶主義運動のみ

ならず、『ダイアル』誌の中心的存在であったエマソンも1844年に世に出たこの「仏陀の教え」の影響を受けたことが充分考えられる。しかし残念ながらこの『ダイアル』誌は次に出版された第4号（April, 1844）をもって閉刊になっている。この『ダイアル』誌は1840年7月に第1巻第1号を出版、10月に第2号、翌年1841年1月に第3号、4月に第4号というように年4回出版している。『ダイアル』誌は「出版直後に四方八方から非難の嵐がまきおこり、編集者は狂人呼ばわりされた」（Smith 33）。如何に編集者及び投稿者たちがこの『ダイアル』誌発行に際して苦労していたかが察せられる。そのような中で「仏陀の教え」が世の人々の非難を覚悟で発行されたということは編集者の強い決断があったからであろう。

季刊誌『ダイアル』はアメリカの「文学正史に確たる地位を占めているが、発行部数はせいぜい300部」（Okker 29-30）であったという。当時エマソンを中心とする超絶主義運動の占める位置は大きかった。だから『ダイアル』誌の発行部数は多くなくても、ラルフ・エマソン、ヘンリー・ソロー、リディア・チャイルド（Lydia Maria Child）、マーガレット・フルー（Margaret Fuller）たちによって書かれたものは理解ある人々には愛読されたであろう。

この「仏陀の教え」は2004年に出版された *Buddhism in the United States, 1840-1925* と題する6巻からなる書物の第1巻の冒頭を飾っている。160年ぶりに日の目を見たことになる。この「仏陀の教え」の内容は仏教経典の一つ、『法華経』の中の「葉草喩品」がとりあげられている。

アメリカ、マサチューセッツ州ボストンの20キロ西にコンコードという町がある。ボストン北駅から2両編成の列車がゆっくりと走る。およそ30分で右手にウォルデン湖が見える。車掌が肉声で「コンコード」と告げると無人のコンコード駅である。イバラ、ガマ、背丈のあるアキノキリンソウなどの植物を見ながら歩く。私たちのほかに歩いていたのはナップサックを背負った一人の年配の女性だけで

あった。彼女は足早だったので気がつくとは歩いてるのは私たちだけであった。コンコード・カールシー・ハイスクール（Concord Carlisle High School）に差し掛かった時小さな掲示板を見た。「1772年以前に自由の身になったスキピオ・ブリストア・奴隷（Scipio Brister Slave）はこの近くに住んだ」と書いてあった。駅から歩いて35分ほどでソローが1845年から1847年まで2年間住んでいた庵の跡に着いた。林の中にあった。礎石の真中に「汝、私の芳香が炉辺から立ち上らんことを」³⁾とソローの詩の一節が刻んであった。2000年9月10日、この日は日曜日であった。ウォルデン湖では人々が水泳、釣り、ジョギングを楽しんでいたので、私たちはウォルデン湖のまわりを歩いて一周した。掲示板には「この水域は危険」と書いてあった。

19世紀においてはこの町でエマソン、ソロー、ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）、オルコット（Amos Bronson Alcott & Louisa May Alcott）親子達が活躍した。この町のエマソンの家で開かれた超絶主義者の会合に「エリザベス・パーマー・ピーボディ（1804-1894, Elizabeth Palmer Peabody）も出席している」（安藤17）。

エリザベス・ピーボディは3人姉妹の長姉で、次女のメアリ（Mary）はアメリカ大衆教育の巨人、ホレース・マン（Horace Mann）の妻である。一番下の妹、ソフィア（Sophia）は19世紀のアメリカを代表する作家、ホーソーンの妻である。「エリザベス・ピーボディは13歳の時に、聖書の翻訳をしたいと述べている」（Matteson 55）。マティソンによると「彼女は語学の才能に優れ、ラテン語、サンスクリット語、ヘブライ語、中国語などに堪能であった」（55-56）。もしピーボディが上記の「仏陀の教え」を翻訳したとすれば、10代の時の聖書の翻訳の願望とラテン語、サンスクリット語などが良く出来たということがあいまって実現されたのではないだろうか。

オルコットと共同で運営した学校では「正しく思い、正しく感じ、正しく行動する」（Matteson 58）ことを教えた。仏教で八正道（正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）という八つの正し

い生活態度の実践徳目がある。オルコットと共同運営した学校の理念と仏教の教えと共通するものが見える。尾形敏彦氏によると、ソローもまた「仏教の八正道を賞賛した」（66）という。

エリザベス・ピーボディが生まれた頃は、「アメリカ人は孤立して、伝統に縛られた閉鎖社会から相互に関連した社会にむけて新しい国作りを始めていた。刷新と創意工夫が求められる時代であった」（Ronda 5）。彼女の助言者、チャニング（William Ellery Channing）は「正しく理解されたその人自身の経験は神の真実、宇宙の法則への道しるべである」と教えた（Ronda 6）。

エリザベス・ピーボディは16歳で教師となり、途中21歳から24歳まで、「当時ボストンの知的な指導者であったウィリアム・エラリー・チャニング（1780-1842）の無給秘書をしている。また、30歳から32歳まで、作家ルイーザ・メイ・オルコット（1832-1888）の父で、教育家として知られるエイモス・ブロンソン・オルコット（1799-1888）の実験的学校、テンプル・スクールでの教育にも携わっている」（進藤189-190）⁴⁾。

「仏陀の教え」序文

次の断片は『良い法の白蓮』と題するネパールの仏教徒の信仰書の一つからの抜粋である。サンスクリット語で書かれた原著はホディソン（M. Hodgson）によって発見された膨大な仏典収集物の一部であり、彼によってパリのアジア協会に送られた。彼は英国のネパール駐在公使であった。

ビュルヌフ（Par M. E. Burnouf）⁵⁾はその後数年間この仏典収集物を調べた。この収集物は仏教徒の正典と認められた經典のかなりの部分を含んでおり、その翻訳はチベット、中国、モンゴルの仏教徒に見られる。次の抜粋が取られた書物は仏陀を敬う全ての国々の人々によって最も大切にされている一つである。この書物はまたこの名前を持つ聖者が見守り、支えていく方法をわかりやすく示している。この仏典

は散文と韻文から出来ている。韻文の部分は散文で書かれた部分の詩的形式よりは韻律形式の再構成である。仏教の起源についてビュルヌフの論文から抜粋を紹介する。

バラモンの特権的な階級は科学と宗教の排他的な独占権を保持していた。彼らの道徳心は弛緩して、それによって無知、強欲及び犯罪が引き起こされた。そういったことによって社会がすでにひどく変化していったことがマヌ法典に記述されている。そういった乱れの中で、紀元前六世紀頃、ベンガルの北に武士階級に生まれた若き王子がその王位を捨て、修行僧になり、仏陀になった。彼の教義は少なくとも大筋として形而上（抽象的、難解な）的より倫理的（精神的）である。そして事実として認められた意見と確実なこととして示された希望に基づいている。この考えは目に見える世界は絶え間のない変化の中にあり、死は生に移り、生は死に移る。彼（彼女）を取り巻いている全ての生き物と同様に人も輪廻という永遠に運動する輪の中でぐるぐる回っていく。人は最も単純なものから最も完璧なものまであらゆる生の形を通じて連続的に変化していく。

この世界の大規模な生き物に人が占める場所は人が行う行為の功德による。かくて徳のある人は、生の後、神聖な身体を持って再び生まれる。極楽の報い、地獄の苦しみはこの世界が含むあらゆるものと同様に限定された継続期間でしかない。時と共に徳のある行為の功德は尽き、悪い行為の不運も消えていく。運命的な変化の法則は地上に神と悪魔を引き戻し、再び裁判にかけ、輪廻の新しい方向に進ませる。仏陀が人にもたらした希望は解放と彼が呼んだものに入ることによって輪廻の法則から脱出する可能性であった。その解放とは最も古い仏教学派の一つによると感覚的な原理のみならず思考原理の涅槃（消滅）である。その涅槃とは死んで初めて完全になる。涅槃を得る予定の人は生の間、無限の科学的知識を備え、それによって純粋なあるがままの世界観が与えられる。即ち身体的及び知的法則の知識、そして六つの優れた完全の行、即ち施し物（善行）、徳行、科学的知識の実

践、努力、忍耐及び慈悲の行為である。仏陀の教えは二つの要素、一つは現実、もう一つは理想からなっていた。一つは行為の規則正しさと神聖さである。そのつつましやかさと辛抱強さが主要な特色を形作っている。二つ目は彼が仏陀になろうとする願望であった。即ち超人的な力と科学的知識を持つことを啓発された。その力でもって彼は悪行の攻撃を追い払った。彼の科学的知識により明白で完全な形をとって過去と未来を述べた。従って彼は以前の生活の中で行った全てを話した。数え切れない多くの人が彼と同じように徳の行いによって仏陀の位に達したことを断言したのである。つまり、彼は救済者として人々にみずからを差し出したのである。彼の死によって彼の教義が無効にはならず、教えは彼の死後も長い時代にわたって存続し、そしてそのためになる行いが終わる時、新しい仏陀が現れ、仏陀であることを表明するであろうと述べた。

言い伝えによると地上に降りる前に彼は天上で未来仏として崇められているという。哲学的な見解によって彼の伝道活動は正しいとされ、全ての階級、ブラフマン、武士、農夫、商人によって共有された。全ての人が等しく輪廻の不可避性、功德と苦しみへの報い、単なる相対的な存在の絶え間なく変化していく状態を断固とした態度で脱出する必要性を信じていた。彼はブラフマンによって認められた真理を信じていた。彼の弟子たちはブラフマンのように生き、彼らのように厳格な罪のあがないを課した。東洋の苦行による肉体を激しく痛めつける古い格言に従った。仏陀は奇跡的な力があるとは言わなかった。事実、彼の対話の一つに次のような注目に値する言葉がある。ある王が仏陀に超人的な力を示すことによって彼の敵を破るよう促した。それは不信を沈黙に変えていった。「王様、弟子たちにはブラフマンやあなたが出会う家の世帯主の前で奇跡を行うようには教えていません。弟子たちには善行はひそかに行い、自らの罪を告白しなさい。それこそが神聖なる奇跡なのです、と教えています」と仏陀は答えた。この透徹した謙虚さ、完全な自制は原始仏教の特徴を示している。そ

れは人々のところを捉える最も力強い方法であった。

「仏陀の教え」『法華経』「葉草喩品第五」

人々が如来（仏陀）に帰依する時、如来は全ての帰依者に平等であって、不平等ではない⁶⁾。「ああ、カーシャパ（摩訶迦葉）よ、如来は太陽や月の光のように等しく徳のある人にも、よこしまな人にも、陽気な人にも、元気のない人にも、良い香りを持つ人にも、悪い臭いのする人にも、全ての人に等しく、同時に光を降り注ぐ。だからカーシャパよ、全能の知識が備わった智慧の光によって全ての如来が尊敬される。良き法への完全な導きは五悪趣に入っている人、また人々の傾向によって大きな乗り物、或いは独覚の乗り物、或いは声聞の乗り物をそれぞれ選ぶ全ての人に等しく必要である。如来には完全な智慧の過不足はない。それどころか全ての人は等しく存在し、科学与徳を兼ね備えて生まれる。カーシャパよ、三つの乗り物はない。他の人とは異なった行為をしている人々がいるのみである。そのために三つの乗り物を識別する。」

如来がこのように述べた後、尊敬すべきカーシャパは世尊に次のように問いかけた。「世尊よ、もし三つの異なった乗り物がないとするなら、現世において一体どうして声聞とか、独覚とか、菩薩といった呼称があるのでしょうか。」カーシャパがこのように問いかけると、世尊は尊敬すべきカーシャパに次のように答えた。「ああ、カーシャパよ、陶工が同じ粘土で異なった壺を作るようなものである。ある粘土は糖蜜が入る壺になり、あるものは澄ましバターの壺になり、あるものはミルクの壺になり、あるものは凝乳の壺になり、あるものは劣悪で不浄な壺になる。このような多様性は粘土によるのではない。粘土を異なった物に表現する時、様々な壺が現れてくる。一つの乗り物しかない。それは仏陀の乗り物である。第二の乗り物も、第三の乗り物もない。」世尊がこのように答えると尊敬すべきカーシャパは世尊に次のように問いかけた。「三界の結合から出た人が異なった傾向を

持っているなら、彼らにはただ一つの涅槃があるでしょうか。二つ或いは三つの涅槃があるでしょうか。」世尊は答えた。「ああ、カーシャパよ、涅槃は全ての法の平等性を理解することに起因する。ただ一つの涅槃があるのみで、二つ或いは三つの涅槃はない。従って、ああ、カーシャパよ、あなたに一つのたとえ話を提示しましょう。洞察力のある人はたとえ話で言わんとすることの趣旨をわかるから。」

「ああ、カーシャパよ、心を閉ざして心の目の見えない人は「あるものは美しい色を持ち、あるものは醜い色を持っているそういうものはない。これらの異なったものを見る人もいない。太陽も月もない。星座も星もない。星を見る人もいない。」と言うかもしれない。別の人は心の目の見えない人に「様々な色があり、様々な色を見る人がおり、太陽、月、星座、星があり、星を見る人がいる」と答える時、心の目の見えない人はそのことを信じないし、それらとの関係も欲しない。あらゆる病気を知っている医師が現れ、この心の目の見えない人を見て、次のような考えが浮かんだ。心の目が見えないのは先の生活でのやましい行為によるものである。この世で現れる全ての病気には四種類ある。風による人、胆汁による人、粘液による人、この三つが合わさった病気の状態による人がいる。この医師はこの病気を治療する手段を熟考して次のような考えが浮かんだ。ここで使用されている薬ではこの邪悪を絶つことは出来ない。山の王、ヒマラヤ山には四種類の薬草がある。それらは何であるのか。一つは全ての臭いと色を所有しているもの。二つ目は全ての病気から救い出すもの。三つ目は全ての毒の効力をなくすもの。四つ目はどんな状態であれ、健康をもたらすもの。これらが四種類の薬草である。

次にその医師はこの心の目の見えない人に哀れみを覚えて山の王、ヒマラヤ山に行く方法を考えた。ヒマラヤ山の頂上に登ったり、谷に下りたり、山を横切ったりして、これら四種類の薬草を発見する。薬草を歯で噛み砕いてから服用させたり、またすりつぶして与えたり、他の薬草と一緒に料理（煮る、焼く、揚げるなど）して与えたり、他

の原料のままの薬草と混ぜて与えたり、針である一定の箇所に入れたり、火の中で焼いて与えたり、他の薬草と混ぜて食品或いは飲み物として与える。

こういった方法を用いた結果、心の目の見えない人は心の目を開き、上下、遠近、太陽や月の光、星座、星、あらゆる形あるものを観て次のように言う。「確かに私は愚かであった。これらを見て、伝えてくれた人を信じなかったのは、今、私はあらゆる物を見て心の闇から開放されて光をとりもどした。私以上の人はこの世界にいない。」

しかしこの時、超自然の智慧を備えた賢人が姿を現す。この賢人たちは神聖な視力、神聖な聴力、他人の考えを知る力、先の生活と超自然力を思い出す力を持っている。彼らはその人に次のように言う。「君は心の視力を回復したに過ぎず、何も知らないのだ。このような思い上がりはどこから来たのか。君は知恵もなく、教育もない。」それから彼らはその人に次のように言う。「君が家の室内に座っている時、君は外の形あるものを見ないし、知ることもない。君は他人の思いが君に対して慈悲深いのか敵意があるか識別できない。君は5ヨージャナ（約6～16キロ）離れたほら貝、太鼓、人間の声に気づかず、わからない。君は1クローシャ（約1.5～4キロ）の距離でも足を使わないで移動することは出来ない。君はお母さんのお腹に生じて、大きくなったことを覚えてはいない。ならば君はどうして博識であろうか。君はどうして全てを知っているだろうか。君はどうして全てを見ることが出来るだろうか。鮮明なものが実は不鮮明で、不鮮明なものが実は鮮明であることを知りなさい。」

それからこの人は賢人たちに次のように言う。「どのような方法で、どのような善行で私は匹敵する智慧を獲得できるでしょうか。お願いですからその徳を得るようにしてください。」賢人たちはその人に次のように言う。「君が智慧を求めるなら、法を思い巡らし、荒野或いは森に或いは山の洞窟で坐禅して、悪の腐敗から自由になることである。そうすれば純化された特質を備え、超自然の智慧を得るであ

ろう。」そこでその人は賢人たちの忠告に従って、宗教的な生活に入り、荒れ野に住み、一つの対象に固定された思いはその世界から解放され、五種の超自然の智慧を獲得した。それらの超自然の智慧を獲得して次のように熟考した。私は以前に追求した行動によって法及び本質を持つことは出来なかった。今はそれどころか私の思いが進むところはどこにでも進むことが出来る。以前はほとんど智慧も判断力もなく、心の目は見えなかった。

ああ、カーシャパよ、私の対話の真の意味をあなたに分かってもらうために提示したたとえ話を注視しなさい。その中に何があるか見なさい。ああ、カーシャパよ、生まれてから心の目が見えない人とは五種類の道の入り口に閉じ込められてその世界を回転している人々を指す。その人々は優れた法を知らず、不鮮明と悪の腐敗の深い闇を積み重ねていく。彼らは無知によって心が闇となり、心の闇の状態で彼らは概念を集め、概念の結果である名前と形のもとで大きな苦悩が生じてくるのである。

しかし如来は三界のしがらみを超えた立場にある。しかし父が最愛の息子に対すると同じように、苦悩している人々に哀れみの心を生じて、三界の世界に降りていった。そこで輪廻の流れに終始している人々、その苦しみの世界から逃れる本当の方法を知らない人々に思いをめぐらす。世尊は智慧の眼で彼らを見て次のことを知るのである。「そもそも徳行という基本的な考えを果たした後、かすかであるが憎しみと生々しい愛着を持ったり、或いはかすかではあるが愛着と生々しい憎しみ、過失を持ったりする人々がいる。ある人々はほとんど理解力がなく、ある人々は賢く、ある人々は円熟に達し、すがすがしい。誤った主義に従う人々もいる。」世尊は意のままに方法を使って三つの乗り物があることを人々に教える。菩薩たちは五種の超自然の智慧を備えた賢人たちのように、完全に明晰な眼を持ち、仏陀の状態の思いをいだき、法におけるすばらしい辛抱強さを獲得し、最高の仏陀の状態に達し、完全に力を発揮していく。これを譬えると如来は偉

大なる医師とみなされ、全ての存在は思い違いによって心が闇になっていると見なされる。愛着、憎しみ、思い違いと六十二の誤った教義は風、怒り、不活発である。四つの葉草は次の四つの真実である。即ち空の状態、原因もなく、対象もなく、涅槃への入り口である。私たちが使用する薬に従って異なった病気を治療する。空の状態、原因がないこと、対象がないこと、涅槃への入り口に従って、それらは無知の行為を捉える。無知の涅槃から観念の涅槃が到来し、大きな悪の涅槃が到来する。その時、人の思いは徳でもなく、罪でもない。

声聞と独覚の乗り物を利用する人は視力を回復する人としてみなされるに違いない。その人は輪廻の不幸の鎖を断ち切り、これらの不幸の鎖から解放され、五つの癖によって入ってしまう三界の結合から救い出される。だから声聞の乗り物を利用する人はこれに従い、仏陀から知るべき法は今後何もなく、もう涅槃を得たのだ、と断言してしまう。しかし世尊はその人に法を示す。全ての法を得ていない人がどうして涅槃を得るだろうか。世尊はその人に仏陀の状態を提示する。この仏陀の状態の思いを抱いた声聞はこの世界の回転の中にはいないが、まだ涅槃を得ていない。三界の再結合の正確な考えを練り上げて、三界は十方において虚空であり、この世界は不思議な亡霊やまぼろしのようにあり、夢や蜃気楼やこだまのようであると観る。全ての法は涅槃の逆であるのみならず誕生の休止でもあり、解除の逆であるのみならず救済でもあり、明白の逆であるのみならず暗さ及び不鮮明に属してもいない。このように深遠な法を観る人は三界の再結合を形作る全ての存在の異なる意見と癖を見る。

法の王に生まれ、存在を律する私は人々の気持ちを認識して彼らに法を説く⁷⁾。偉大な勇者たち、彼らの智慧は堅固で、私の言葉を長い間よく保ち続けている。彼らはまた私の奥義を守り、生き物にはそれを示さない。まことに無知なる人はそのような科学知を聞いても理解することが非常に困難である。彼らはむくむくと疑いを抱き、気が動転して、科学知に背き、誤りに陥る。私は私の言葉をそれぞれの問題

と能力に応じて適合させていく。また反対の説明によって教義を正していく。ああ、カーシャパよ、あたかも雲が全世界に生じ、それを覆いつくし、全ての大地を包み隠すようなものである。水をいっぱい含み、稲妻の花輪で囲まれた大きな雲は雷を鳴り響かせ、全ての生き物に喜びを広める。太陽の光を止め、世界圏をさわやかにして、雲は手で触れることが出来るほど大地に近づき、あらゆる所に雨を降らす。大量の水を一様に散布し、その縁からもれる稲妻で光り輝き、大地を喜ばせる。大地の表面から勢いよく現れる薬草、ハーブ、灌木、森の王たち（喬木）、小さい木、大きい木が生えてくる。種々の種子、あらゆるものが瑞々しくなる。あらゆる野菜が山に、洞窟に、木立に見られる。薬草、灌木、木々は雲によって喜びいっぱいになる。雲は乾いた大地にも喜びを与え、薬草を潤す。雲の同質の水は薬草や灌木の勢い、対象に応じて吸い上げられる。大中小の種々の木々はその年齢、強さに応じてその水を吸収する。木々はその必要度に応じて水を吸収する。偉大な薬草はその幹、小枝、樹皮、枝、大枝、葉っぱから雲からの水を吸収し、花や実を出す。雲から落ちる水は同じであるが、それぞれの強さに応じて、その目的に応じて、生えてくる胚種の性質にしたがって、異なった実を生み出す。ああ、カーシャパよ、宇宙を覆う雲のように仏陀は世界に現れる。仏陀ほど生き物に本当の教義を話し、教える師はいない。

この世界で尊敬され、神々と和合した偉大なる聖者は次のように述べる。「私は如来であり、勝利者であり、最上者である。私は雲のようにこの世に現れた。手足が硬くなり、存在の三重の状態に執着している全ての人々を喜びでいっぱいにして。苦悩によって元気を失った人々に幸福を打ちたて、喜びと平安を与えよう。大勢の神々と人々よ、私の言うことを聞きなさい。私に近づき、私を見よ。私は如来であり、聖者であり、最も勝れたものである。世界を救うためにこの世に生まれてきた。無数の生ける存在者に純粹で美しい法を説くのである。その本質は一であり、同質である。それは解放と平安である。一

つの同じ声で法を説く。仏陀の状態を常に主題にする。というのは法は不変であり、不平等の余地はない。そこには愛情も憎しみもない。あなたは改宗するかもしれない。私は誰に対してもひいきも嫌悪もない。全ての人に説明するのは同じ法であり、ある人に対すると同じように他の人に法を説く。

もっぱらこの勤めに専念して、法を説く。私は休んでいても、立っ
ていても、寝床に横たわっていても、椅子に座っていても疲れを感じ
ることはない。雲が同じ水をあらゆる所に注ぐように私は全宇宙を歡
喜で満たす。私はいつも尊敬すべき人々にも、そうでない人々にも、
徳のある人々にも、悪いことをした人々にも、勝手気ままな人々にも、
きちんと行動する人々にも、異説教理に従う人々にも、筋が通っ
て完全な教義に従う人々にも法の歡喜を与える。劣った心の人々にも、
偉大な心の人々にも、超自然的な力を持つ人々にも法を説く。私は
疲れを寄せつけず、どこにでも足を伸ばし、適切な態度で法の雨を
降らす。私の声を聞いた後、強さ（体力、精神力、財力、知力）に応
じて、それぞれが異なった状況に、例えば神々の間に、人間の間に、
美しい体の中に、聖王の間に、ブラフマンの間に、転輪王の間に落ち
着く。

耳を傾けてください。この世界で目にするつつましく、小さな植
物、中くらいの植物、そして高い木について説明しよう。欠点のない
法の知識を持って生きる人々、涅槃を得た人々、六種の超自然智と三
種の学識を持っている人々は小さな植物と名づけられる。山の洞窟に
独覚の状態を切望する人々、半ば浄化された人々は中ぐらの植物で
ある。私は仏陀になり、神々と人間の指導者になろうと言って、勇者
の位を求める人々、エネルギーと観想を修める人々は最も高い植物で
ある。自制して静かに慈悲心を養い、人々の間で勇者の位を心に抱く
人々は木々と呼ばれる。車輪を回転させ、振り返らず、超自然能力を
持ち、無数の人々を自由にする人々は偉大なる木々と呼ばれる。

同じ水が雲から注がれるように勝利者（仏陀）によって説かれるの

は一つの同じ法である。述べたように異なった能力を持っている人々は大地の表面から現れる異なった植物のようなものである。

この例とこの説明によって如来が活用する方法がわかるでしょう。如来はただ一つの法を説くけれど、法の異なった展開は雨粒に似ている。私は法の雨を状況に応じて注ぎ、全世界は満足で満たされるでしょう。人々は私が説く一つの法を力量に応じて観想し、受け止めていく。雨が降り注ぐ時、葉草も灌木も中ぐらいの植物も、あらゆる大きさの植物もあらゆる所で輝くでしょう。

この教えは世界の人々の幸せのために存在し、全ての宇宙の世界に異なった方便によって喜びを与える。全ての世界の人々が、植物が花で覆われるように喜びで溢れる。大地に生長する中ぐらいの植物は断固として欠点を失くし、広い森を駆け巡り、菩薩たちによく教えられた法を示す尊敬に値する聖者のようなものである。多くの菩薩たちは記憶と忍耐を備え、三界の正確な思想を持ち、仏陀の最高の状態を求め、木のように大きく成長する。超自然の能力を持ち、四種の瞑想を行い、空を聞いて喜びを体験し、無数の光を体から発する人々は大樹と呼ばれる。

この法の教えは、ああ、カーシャパよ、あらゆる所に雲がもたらす水のようなものである。それによって偉大なる植物がいっぱい花を咲かせる。それ自身の原因である法を私は説く。盛りの時に偉大なる聖者に属している仏陀の状態を試みた。私は巧みに方便を使う。それによって世界の人々を導いていく。

私が述べたことは最高の真理である。聴衆のみなさんは完全な涅槃に到達するであろう。皆さんは仏陀の状態に通じる優れた方法に従うであろう。聴衆の皆さん、私の述べることを聞いて仏陀になるであろう。

訳者注

1) “The Preaching of Buddha.” *The Dial: A Magazine for Literature, Philosophy,*

- and Religion*. Vol. IV. January, 1844: 391–401. New York: Russell & Russell, 1961 参照。
- 2) Thomas A. Tweed. “Introduction.” *Buddhism in the United States, 1840–1925*. Vol. 1. Tokyo: Edition Synapse, 2004. xi.
- 3) 下線部がソローの庵跡に刻まれている。
- Light-winged Smoke, Icarian bird,
Melting thy pinions in thy upward flight,
Lark without song, and messenger of dawn,
Circling above the hamlets as thy nest;
Or else, departing dream, and shadowy from
Of midnight vision, gathering up thy skirts;
By night star-veiling, and by day
Darkening the light and blotting out the sun;
Go thou my incense upward from this hearth.
And ask the gods to pardon this clear flame.
- (*The Writings of Henry David Thoreau II, Walden 279*)
- 4) 藤原保利氏は「1860年にボストンに最初の英語による幼稚園を開設して以来、フレーベル主義幼稚園の普及に大きな役割を果たしたエリザベス・パーマー・ピーボディの活動も看過することはできないであろう」と述べている。(63)
- 5) フランスのビュルヌフ（1801–1852）はイギリスの駐ネパール公使であったホジソン（Hodgson）から贈られたネパール本を翻訳した。それは2巻本でその表題を *Le Lotus De La Bonne Loi* といい、ビュルヌフの死後、パリで出版せられ、翻訳とノートから成っている。（坂本幸男編『法華経の思想と文化』243–244）
- 6) この「仏陀の教え」の始まりの下線部は坂本・岩本訳注『法華経』（上）「菓草喩品」（岩波書店）、287頁5行に対応する。つまりこの「仏陀の教え」と岩波本では始まりが異なる。
- 7) 下線部は坂本・岩本訳注『法華経』（上）「菓草喩品」（岩波書店）、273頁6行に対応する。

引用・参考文献

安藤正瑛『ニュー・イングランド 文学精神の諸相』東京：朝日出版社、1979。

Buddhism in the United States, 1840–1925. Vol. 1. Tokyo: Edition Synapse, 2004.

「アメリカにおけるフレーベル主義幼児教育思想の普及と展開に関する一考察」『教育学雑誌』第28号（1994）：60–75。

- Matteson, John. *The Story of Louisa May Alcott and Her Father*. New York: Norton, 2007.
- 尾形敏彦『エマソンとソーロウの研究』東京：風間書房、1980.
- オッカー・パトリシア (Okker, Patricia) 『女性編集者の時代』 (*Our Sister Editors*) 鈴木淑美訳、東京：青土社、2003.
- 大谷大学尋源会『梵漢対照新訳法華経』南条文雄・泉芳環共訳、京都：平楽寺書店、1973.
- Ronda, Bruce A. *Elizabeth Palmer Peabody: A Reformer on her own Terms*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1999.
- Rudy, John G. *Emerson and Zen Buddhism*. New York: Edwin Mellen P, 2001.
- 進藤鈴子『アメリカ大衆小説の誕生』東京：彩流社、2001.
- 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』(上) 東京：岩波書店、1977.
- 坂本幸男編『法華経の思想と文化』京都：平楽寺書店、1981.
- 勝呂信静編『法華経の思想と展開』京都：平楽寺書店、2001.
- Smith, Harmon. *My Friend, My Friend The Story of Thoreau's relationship with Emerson*. Amherst: U of Massachusetts P, 1999.
- The Dial: A Magazine for Literature, Philosophy, and Religion*. Vol. 4. January 1844: 391-401. New York: Russell, 1961.
- Thoreau, Henry David. *The Writings of Henry David Thoreau*. Vol. 2. New York: AMS P, 1968.
- Tweed, Thomas A. *The American Encounter with Buddhism 1844-1912*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2000.
- ウィッチャー・ステイーヴン (Whicher, Stephen E.) 『エマソンの精神遍歴——自由と運命』 (*Freedom and Fate—An Inner Life of Ralph Waldo Emerson*) 高梨良夫訳、東京：南雲堂、2001.